

I. 導入

おはようございます。ブラジルのリオデジャネイロには、町を一望する丘の上に巨大なイエス像が立っています。高さ 30 メートルのこの像は、幅 30 メートルに広げられた腕をもって、全市民をイエスのもとに招いています。まっすぐに広げられた腕は、イエスがすべての人を救いへと招いてくださることを象徴しています。この像が現わすように、今日の聖書箇所は、イエスが手を広げてすべての人を御許に迎えてくださることを語っています。



使徒言行録 11:1-18 を読みましょう。

II. 聖書朗読 使徒言行録 11:1-18, (新共同訳)

11:1 さて、使徒たちとユダヤにいる兄弟たちは、異邦人も神の言葉を受け入れたことを耳にした。11:2 ペトロがエルサレムに上って来たとき、割礼を受けている者たちは彼を非難して、11:3 「あなたは割礼を受けていない者たちのところへ行き、一緒に食事をした」と言った。11:4 そこで、ペトロは事の次第を順序正しく説明し始めた。

11:5 「わたしがヤッファの町にいて祈っていると、我を忘れたようになって幻を見ました。大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、天からわたしのところまで下りて来たのです。11:6 その中をよく見ると、地上の獣、野獣、這うもの、空の鳥などが入っていました。11:7 そして、『ペトロよ、身を起こし、屠って食べなさい』と言う声を聞きましたが、11:8 わたしは言いました。『主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は口にすることがありません。』11:9 すると、『神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言ってはならない』と、再び天から声が返って来ました。11:10 こういうことが三度あって、また全部の物が天に引き上げられてしまいました。

11:11 そのとき、カイサリアからわたしのところに差し向けられた三人の人が、わたしたちのいた家に到着しました。11:12 すると、“霊”がわたしに、『ためらわないで一緒に行きなさい』と言われました。ここにいる六人の兄弟も一緒に来て、わたしたちはその人の家に入ったのです。11:13 彼は、自分の家に天使が立っているのを見たこと、また、その天使が、こう告げたことを話してくれました。『ヤッファに人を送って、ペトロと呼ばれるシモンを招きなさい。11:14 あなたと家族の者すべてを救う言葉をあなたに話してくれる。』11:15 わたしが話しだすと、聖霊が最初わたしたちの上に降ったように、彼らの上にも降ったのです。

11:16 そのとき、わたしは、『ヨハネは水で洗礼を受けたが、あなたがたは聖霊によって洗礼を受ける』と言っておられた主の言葉を思い出しました。11:17 こうして、主イエス・キリストを信じるようになったわたしたちに与えてくださったのと同じ賜物を、神が彼らにもお与えになったのなら、わたしのような者が、神がそうなさるのをどうして妨げることができたでしょうか。」11:18 この言葉を聞いて人々は静まり、「それでは、神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ」と言って、神を賛美した。

III. 教え

この箇所は、ほとんどが使徒 10 章のできごとのあらましです。カイサリアにあるコルネリウスの家を訪ねた後、ペトロはエルサレムに戻り、神が幻をおして教えてくださったことを兄弟たちに伝えました。**(使徒 10:15)「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。」**神はペトロに幻をお見せになり、あることを明らかにされました。それは、幻が食べ物のことにとどまらず、神がすべての民を受け入れてくださることを示すメッセージであったことです。神はカイサリアでコルネリウスと彼の家族に聖霊を注がれ、異邦人を受け入れてくださっていることをあらわしてくださいました。



イエスはまさに腕を大きく広げ、すべての人を神の家族に迎えてくださいます。ローマ **10:12-13** が語るとおりです。「**10:12 ユダヤ人とギリシア人の区別はなく、すべての人に同じ主がおられ、御自分を呼び求めるすべての人を豊かにお恵みになるからです。 10:13 『主の名を呼び求める者はだれでも救われる』**のです。」

これはすばらしい福音です。けれども当初、ユダヤ人のクリスチャンにとって、これは受け入れがたい真理でした。神の恵みを喜び感謝するべきところですが、彼らの最初の反応は否定的でした。「**11:2 ペトロがエルサレムに上って来たとき、割礼を受けている者たちは彼を非難して、 11:3 『あなたは割礼を受けていない者たちのところへ行き、一緒に食事をした』**と言った。」当時、ユダヤ教の教師たちは、ユダヤ人は異邦人の家に入ったり異邦人と食事をともにしたりしてはならないと教えていました。イエスの最初の弟子たちは、子どものころからこういったしきたりに慣れ親しんでいました。ですから、カイサリアで起こったできごとを聞いてまず、ペトロを批判したのです。ペトロが慎重に説明をしてやっと、彼らは喜んで神に感謝をささげました。

私たちはどうでしょう。すぐに批判していませんか。なかなか感謝をささげないでいませんか。批判するのが好きな人もいます。そういう人たちは、あれこれ人の荒探しをします。クリスチャンでも、批判が御霊の賜物だと勘違いしているような人がいます。例えば、有名な教会や牧師の名前を挙げると、そういう人はすぐにその教会や牧師の欠点を並べます。兄弟姉妹の名前が会話に出てくると、その人について何か否定的なことを言います。

兄弟姉妹、そして友である皆さん、もし自分には批判の賜物があると思うなら、その出元を確認してください。聖霊は兄弟姉妹に害を与えるような賜物をお与えになりません。そういう賜物は違う霊から来ているはずで、悪魔は常に教会内に問題を起させようと機会を狙っています。そして、互いに批判し合うようにたきつけるのは、悪魔の常とう手段です。ですから、私たちは自分の心と舌を守る必要があります。批判的にならないためです。



悪魔は有害な贈り物をたくさん私たちに押し付けようとします。批判、怒り、嫉妬、恨み、肉欲、性的不道徳、噂話、ごう慢、など挙げればきりがありません。ここで、**エフェソ 4:31-32** にあるパウロの言葉に注目してください。「**4:31 無慈悲、憤り、怒り、わめき、そしりなどすべてを、一切の悪意と一緒に捨てなさい。 4:32 互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように、赦し合いなさい。**」

悪魔が私たちの生活に植え付けようとする有害物質は、罪と誘惑です。このような有害物質は、誰もが持っています。そこでイエスはもっと良い道を示してくださいました。それは、赦し、親切、そしてあわれみを人に施すという生き方です。私たちはイエスの模範に倣って生きたいものです。そうすれば、誰にとっても百害あって一利なしというような有害物質の数々を捨て去ることができるでしょう。

しかし、まず罪を悔い改めなければ、イエスに倣うことはできません。罪の悔い改めについては、あまり誰も触れませんが、聖書はこのことを



たびたび取り上げています。旧約聖書では、預言者ヨナがニネベの町に送られ、そこでこう語りました。(ヨナ 3:4)「あと四十日すれば、ニネベの都は滅びる。」ニネベの人々はこのメッセージを聞いて、皆悔い改めました。ニネベの王までもが王衣を脱いで灰の中に座りました。ニネベは非常に邪悪な町でしたが、神はこの人たちの悔い改める姿を見てあわれんでくださいました。

新約聖書では、まずバプテスマのヨハネが、そしてイエスが悔い改めを教えました。公の働きの初めのころから、イエスは人々に悔い改めるよう強く勧めました。マタイ 4:17 によると、バプテスマのヨハネが投獄されると、「そのときから、イエスは、『悔い改めよ。天の国は近づいた』と言って、宣べ伝え始められた。」天の国が近づいたのなら、当然自分の生き方を省み、罪を悔い改めるべきでしょう。

イエスの教えに断固反対する人々について、イエスは厳しい発言をなさいました。ルカ 11:32 で、このように警告しておられます。「また、ニネベの人々は裁きの時、今の時代の者たちと一緒に立ち上がり、彼らを罪に定めるであろう。ニネベの人々は、ヨナの説教を聞いて悔い改めたからである。ここに、ヨナにまさるものがある。」

悔い改めの重要性と必要性は、御言葉にはっきりと見て取れます。しかし、聖書をあまり読んだことのない人にとっては、悔い改めの意味がわかりにくいかもしれません。聖書が教える悔い改めについて、よく誤解されることがふたつあると思います。

まず、神の前に行くには、自分の生き方をまず改めなければならないという誤解です。こういう言葉をよく耳にします。「いろんな罪から足を洗って清くなったら、クリスチャンになります。」これは大きな間違いです。というのも、私たち人間には罪を犯すのを止めたり、自分を清めたりする力はないからです。それは、イエスを心にお迎えして初めてできることです。罪を犯すのを止められたらクリスチャンになるというのは、病気が治ったら病院に行くと言っているのと同じことです。これは本末転倒な見方で、うまくいきません。私たちがイエスに人生を明け渡すと、聖霊をいただきます。この聖霊が、イエスにもっと近づいたり、もったきよい生き方をしたりする手伝いをしてくれるのです。罪に背を向けるには、聖霊の助けが必要です。

次に、悔い改めは後悔と同じだという誤解です。これは、自分の犯した罪を後悔しているから、もう悔い改めたのだと思いつくことです。しかし、真の悔い改めは、悪いと思うこと以上です。真の悔い改めは心や態度が変わることを含みます。そして、生き方の変化も含みます。パウロがコリントの教会に宛てて書いた手紙の一節を見てみましょう。コリント第二 7:10「神の御心に適った悲しみは、取り消されることのない救いに通じる悔い改めを生じさせ、世の悲しみは死をもたらします。」世の悲しみや世の後悔というものがあります。これは、救いには至らないのです。

真の悔い改めは、心や考え方に変化をもたらします。救いに至る真の悔い改めには、自己認識やイエスについての考え方の変化が伴います。世間の人々は、自分の罪を後悔します。それは、自分が痛い目に遭うからです。一方、霊の人は自分の罪を悲しみます。それは、イエスを悲しませるからです。本当に悔い改めているなら、イエスを人生の主とし、このお方中心の生き方になります。再び罪に陥って悔い改めなければならないこともたびたびあるでしょうが、クリスチャンにとって、悔い改めの根底には主なるイエスに喜んでいただきたいという願いがあります。真の悔い改めは私たちがイエスのもとに立ち返らせ、イエスとの関係を新たに深めてくれます。また、イエスが十字架上で備えてくださった救いを喜ぶ心を与え、イエスの愛とあわれみ、そして赦しに対する感謝を増してくれます。

真の悔い改めは、心や考え方の変化をもたらすだけでなく、生き方や言動にも変化をもたらします。心から悔い改めた人は、罪を憎み、神を愛するようになります。真の悔い改めは、私たちのアイデンティティーさえも変えます。つまり、新しく生まれ変わった神の子となるのです。



私たちは霊において新生を経験しなければなりません。イエスにおいて新しくされる必要があります。キリストの光なしには、罪がどれほど深刻なものかを知ることさえできません。このウェディングドレスの写真をみてください。インクのしみが見えますか。もちろん見えますね。では、このホールが真っ暗だと想像してみてください。まったく明かりはありません。誰かがこのドレスを着てここに入ってきて、インクのしみは見えますか。見えません。暗闇では、白いドレスについて真っ黒なしみも見えないのです。

同様に、イエスのもとの来る前の私たちは、暗闇の中に生きていて、自分の罪がわかりません。世間の目は、ほとんどの罪を認識することができません。それは、この世が暗闇だからです。**エレミヤ 17:9 (新改訳)**は、この問題を次のように説明しています。「人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。」イエスを離れては、自分の本当の罪深さを知ることさえできません。

カルバリ・チャペルのチャック・スミス牧師は、罪深い心の問題を説明する際、開拓時代のアメリカ文化を例に使うことがあります。まず、ちょっとおもしろいので、その背景を少し説明させてください。1810年、マサチューセッツ州である団体が設立されましたが、その団体は今も健在です。その団体のメンバーには、レーガン元大統領、ブッシュ元大統領、ローマ法王ヨハネ・パウロ二世、ゴルバチョフ元書記長、ラクエル・ウェルチなど著名人が数多く含まれます。これほど長く存続し、このようなメンバーを誇る栄誉ある団体とはどんな団体でしょう。その団体名は、**デダム馬泥棒捕縛協会**です。



近年、この団体は年一度会合を催すディナークラブになっています。けれども、元来の目的は、もっと深刻なものでした。鉄道や車が発明される以前、馬は日常生活に欠かせないものでした。馬は、車であり、仕事であり、娯楽であり、安全を守るものでした。馬があれば遠くに行けますし、農場や牧場で働くこともできます。乗馬を楽しむこともできますし、危険が迫れば逃げることもできます。そういうわけで、馬は生活必需品だったわけです。ですから、馬泥棒は何よりも卑劣な犯罪だと考えられていました。



こういう背景を踏まえて、チャック・スミス牧師が罪深い心の問題をどのように説明したか見てみましょう。チャック牧師はこう言いました。「人は馬を盗むから馬泥棒になるのではありません。人は、馬泥棒だから馬を盗むのです。」わかりましたか。馬泥棒は心から馬泥棒なのです。それがその人の本性なのです。

罪の問題の根本は、目に見える行動ではありません。根本の問題は、心の中から罪人だということです。罪の問題について考えるとき、私たちは自分が今までに犯してしまった罪が頭に浮かびます。しかし、本当の問題はそれ以上に根が深いのです。それは、私たちの本性です。私たちの心の中に問題があります。**マタイ 15:19** でイエスがおっしゃったとおりです。「**悪意、殺意、姦淫、みだらな行い、盗み、偽証、悪口などは、心から出て来るからである。**」

真の悔い改めは、心の変化を伴います。なぜなら、私たちの罪が心から起こるからです。罪の出所が心だからです。真の悔い改めは、私たちをイエス・キリストを信じる信仰による神との正しい関係へと導いてくれます。そうすると、神が新しい心を与えてくださいます。私たちは新しい人として生まれ変わり、神を愛し、神のみこころにかなうことをするようになります。

不信仰を悔い改め、イエスを主であり救い主として信じるなら、暗い部屋に明かりがついたようになります。物の見え方が変わり、聖霊に導かれてイエスに従うようになります。**エゼキエル 36:26-27** は、この新生について次のように語ります。「**36:26 わたしはお前たちに新しい心を与え、**

お前たちの中に新しい霊を置く。わたしはお前たちの体から石の心を取り除き、肉の心を与える。36:27 また、わたしの霊をお前たちの中に置き、わたしの掟に従って歩ませ、わたしの裁きを守り行わせる。」

IV. むすび

最後に、もうひとつお伝えしたいと思います。私たちがイエスを信じる時に神が与えてくださる救いは、無償の賜物であり、神からのプレゼントです。自力で手に入れることはできません。ただ主に向かって救ってくださいと願い求めるのみです。始めから最後まで、これは神の働きです。悔い改めさえも、神からの賜物です。改めて、**使徒 11:18** をご覧ください。「この言葉を聞いて人々は静まり、『それでは、神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ』と言って、神を賛美した。」

コルネリウスと彼の家族は、ペトロが来て教えを説いてくれた時に、イエスを信じ、聖霊を受けました。しかしこれは、神が恵みを無償の賜物として与えてくださったからこそ可能になったことだということを、弟子たちはわかっていました。神の恵みが彼らを悔い改めへと導いたのです。罪によって心が責められたり、罪悪感が重くのしかかったりする経験をしていますか。自分で自分を変えようとしたけれども、うまくいかないと感じたことはありますか。もしそうなら、皆さんに良い知らせと悪い知らせがあります。悪い知らせは、自分で自分を変えようといくら頑張ってもきつとずつとうまくいかないということです。しかし、良い知らせは、イエスを頼って救いを求めるなら、真の悔い改めと救いに至る信仰という賜物を与えてくださるということです。イエスを信じましょう。そうすれば、このお方があなたに新しい心を与えてくださいます。

祈りましょう。

V. 祈り